

創作子どもSF全集 3

う ちゅう

宇宙バス

香山美子・著／小林与志・絵



こう やま よし こ
香 山 美 子

宇 宙 バ ス

国土社 1969

110P. 21cm×19cm (創作子どもSF全集 3)

基本カード記載例

© 創作子どもSF全集 3

宇 宙 バ ス

初版印刷 一九六九年三月十五日

初版発行 一九六九年三月二十五日

定価 四八〇円 《検印廃止》

著 者 香山美子
こうやまよしこ

発行者 長宗泰造

印刷所 株式会社厚德社

発行所 株式会社国土社

東京都文京区目白台一 一七―六

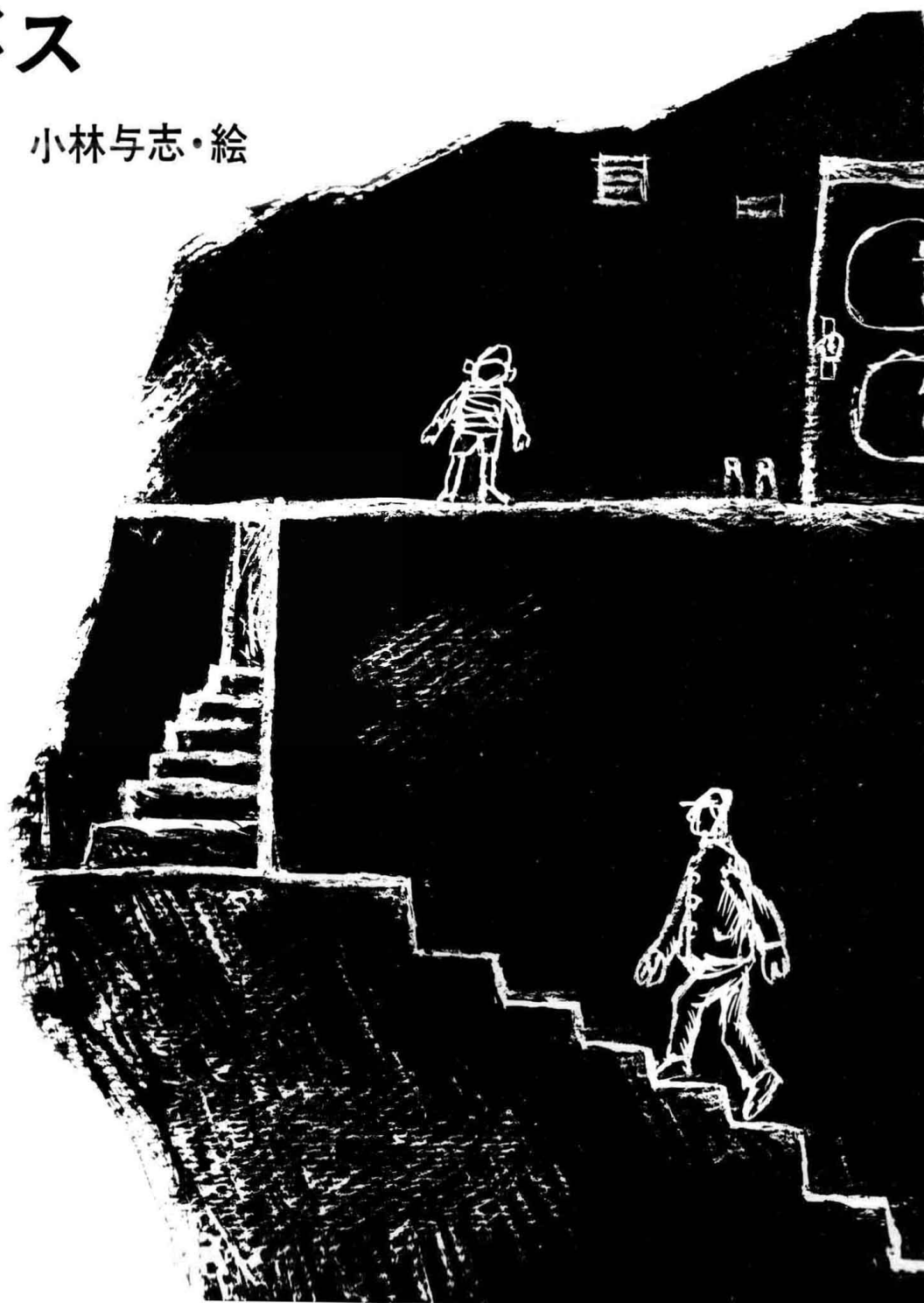
電話 (九四三) 三七二二(代)

振替 東京九〇六二二

乱丁・落丁の本はおとりかえします

宇宙バス

山美子・著 小林与志・絵



*もくじ

宇宙バス^{うちゅうバス}

5

四〇四号室^{しうしつ}

6

足だけが歩く道

20

九月九日

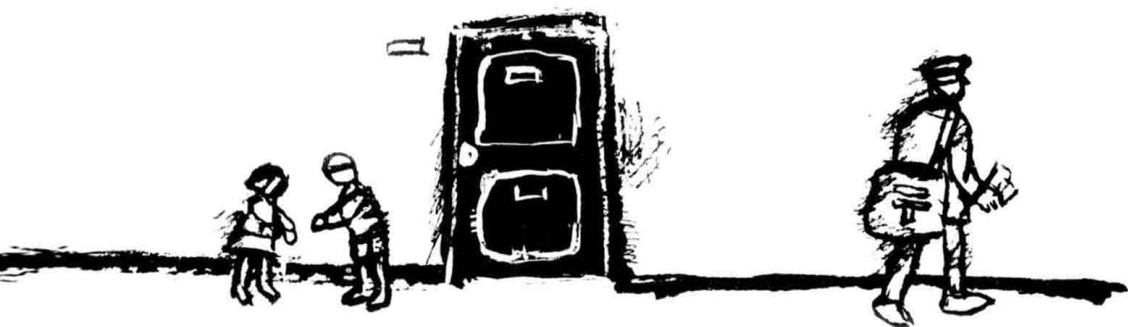
38

ゆめのむこう

66

ナンバー9

69





あ
と
が
き

こ
ば
や
し
よ
し

108

文 香山 美子

絵 小林 与志

一九二八年、東京にうまれる。一九四九年、金城女子専門学校国文科を卒業する。童謡、

NHKの放送台本なども執筆し、一九六三年

に『あり子の記』により第三回日本児童文学

者協会賞、第一回NHK児童文学奨励賞を受

賞する。ほかに、短編集『五時間めのノート』

『空をはしるヨット』など、童謡では『おは

なしゆびさん』『山のワルツ』などがある。

住所 東京都世田谷区船橋町西経堂住宅

一一一三〇四

一九二四年、東京にうまれる。太平洋美術
学校で洋画をまなぶ。物語性のあるものに興
味をもち、一九六一年ごろから、児童向出版

物の装丁、さし絵を手がける。

おもな作品に『パール街の少年たち』『セ

リヨジャはひとり』『あくまとパンきれのし

かえし』などがある。

児童出版美術家連盟所属

住所 東京都葛飾区東金町一一三六

公団住宅一一一二二五



宇宙バス



四〇四号室^{ごうしつ}

1

「ただいま」

タツオくんが学校からかえつてくると、もう、おとなりの四〇四号^{ごうごう}——ミズタニさんの家は、ひっこしのさいちゆうでした。

ピアノを、トラックのおじさんや、ミズタニさんのおじさんが、せまい玄関^{げんかん}のドアから、いっしょうけんめい、だそうとしていました。

「……だめだ、こりやアムリだよ」

「やっぱりねえ」

「いったい、ピアノを買^かったときは、どうやって部屋^{へや}にいたんですかね」
トラックのおじさんがききました。



「あ、そのときはネ、ピアノやさんがロープで窓まどからつりあげたんですワ」

ミズタニさんのおくさんがいました。

「——せまいところに、大きなものを、たくさん買かいこんでいるから、たいへんだ」

「しかたがないでしょ。大きな部屋へやのいっぱいある、ゆっくりした入口のひろい団地だんちをつくってくれない人が、わるいのよ」

タツオくんは、おとなりの家のなかを、はじめてみました。

ステレオがあるし、カラーテレビと、小さいテレビと、テレビが二つもあるし、くろいぴかぴかの皮かわのソファや、サイドボードが部屋へやのまんなかで、あっちゃ、こっちゃをむいて、

“どうするつもりかー”

と、いばっているようでした。

「ママ、おとなりのミズタニさんち、どこへひっこすの」

「さあね」

「お家を買ったのかしら」

「……さあ」

「ママ、うちもひっこそうよ」

すると、ママがいいました。

「ひっこしなんて、とんでもない。あのね、この団地にはいるんだってね、ママとパパは五十三回もくじびきにはずれて、やっと五十四回めに、あたったのよ」

「へーえ、五十四回」

「そうよ」

なんてがまんづよいパパとママでしょう。

タツオくんはあらためて、パパとママをえらいと思いました。

「わかるでしょう。そうして、やっとできたパパとママとタツオちゃんなん
だもの、もうずーっと、ここにいろの」

「……」



タツオくんは、考えました。

もうずーっと、ここにいます！」

ママはかんとんにいうけれど……タツオくんが大きくなって、およめさんをつれてきたら、どうするんでしょう。

タツオくんと、およめさんはまた、くじを五十四回かいもひいて、べつの団地だんちをみつけるんでしょうか。

「たいへんだなア」

それに、タツオくんのおよめさんが、ふたごばかりうんで、せまい部屋へやのなかに、0さいの子が二人と、三さいぐらいの子が二人と、一年生いちねいぐらいの子が、二人いたら……二段ベツトを三つも、買かってこなくてはなりません。

「こまるなア」

ちょうどそのころ、

「こまるなア」

タツオくんと、おんなじことを、まったくこまっている人たちがいました。

大きなビルディングのひろい部屋、ゆかには、まっかなじゅうたんがしいてある、この国の長官たちの特別会議室です。

さっきから、みんなが、顔をしかめてはきだしているため息が、もう各長官の首のあたりまで、おもたくつもっていました。

「このへんで、決をとりましたえ」

首相が、ため息のえりまきにつつまれていたアゴをしゃくりました。

「では、さんせいのかたは？」

三角の目、ほそい目、たれさがっている目、くりくり目、じっとふさいでいる目、……

いろんな目が、えりまきの首のまま、首相のほらをみました。

「……反対のかたは？」

いろんな目が、いちどに目をつぶりました。

「では」

首相はゆっくりとうなづきました。そして、いいました。

「では国際宇宙局に可能なかぎり早急に、わが国は、このA・A・A計画に参加し、協力をおしまないものであることを通告したまえ——」

特別会議はおわりました。

「いやーあ」

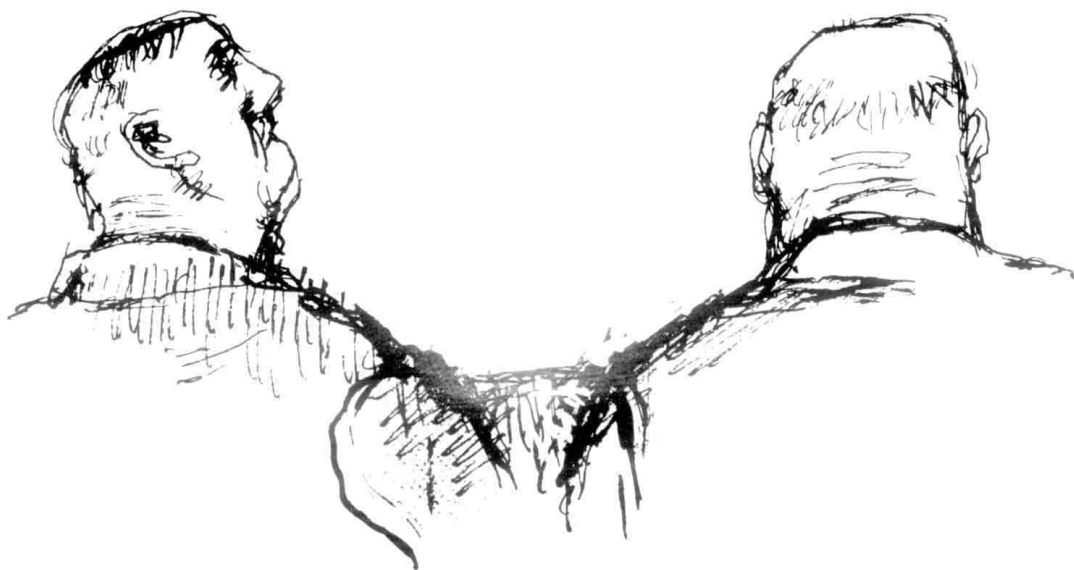
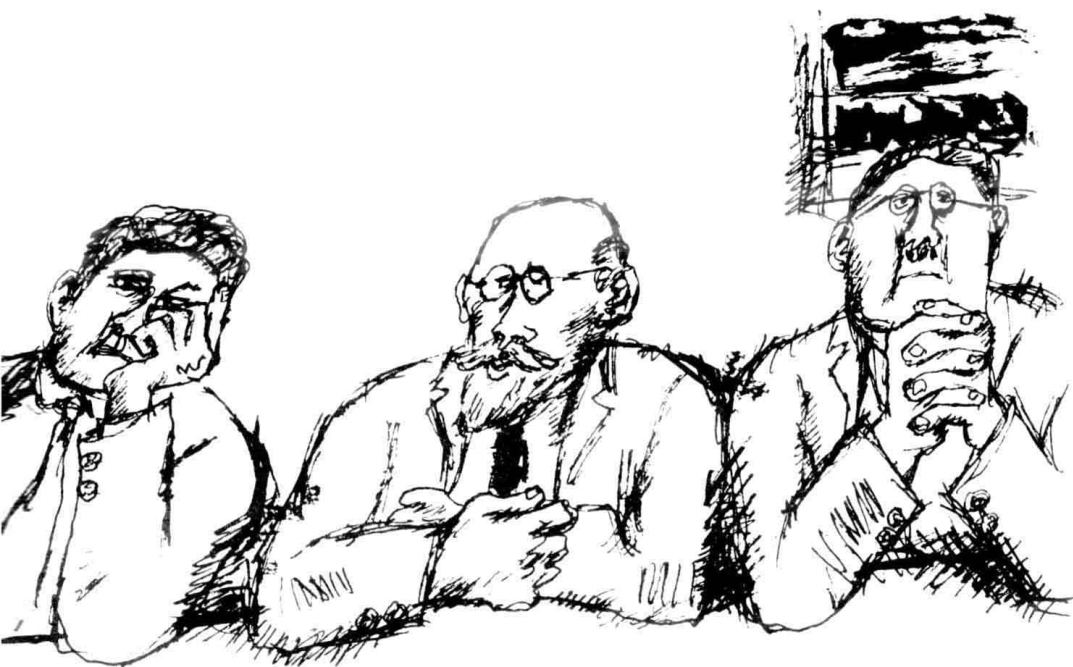
長官たちはとたんに、となりどうしむきあって、おしゃべりをはじめました。

「学者たちがいつていたけど、やはり、ほんとうでしたなア」

「世界中の人口が、たった三十年で倍になってしまったなんて……。まだ、わしは信じられない」

「まったく」

「三十年まえというと……ん、ちやうどわしは三十。いまの首相が、わしの、このいす——国務省の長官になったばかりのことだね。わしは、長官秘書として、もちろん、学者の警告をきいたがね、しようじきのところ、こう思ったね。学者というものは、いったいなにを考えておるのか、のんきなものだねえ。だって、きみ。三十年もさきのことなんだよ。」



そんなさきのことを、きかされたって、きょうの宿題が多すぎて、それだけでいっぱいさ」

「まったく」

「しかしね。わしは、けっして学者とか医者とか、識者とか、者の字のつくものを尊敬してはいないわけではない。いや、むしろ、異常に尊敬しているひとりだね。うそではないよ。その証拠にだ——なにかコトがおこる。わしはすぐに、学者たちがなんと思っているかをきく。

ねえ、きみ、尊敬ということは、そういうことではないかね。むかしのことわざにも、あつたと思うよ。うむ、そうそう。

——こまつたときの神だのみ——

こんどのことだってそうだ。国際宇宙局から計画をないできかされたとき、まず学者たちをあつめて、審議会をつくらせたのは、わしだからね。——
わしはすこしもまちがってはいなかった。

……いや、まちがいがあつたとすれば、あまりにも、学者というものもを尊敬しすぎていたということかもしれない……」

「という……」

「諸先生はね、こういうことをいうんだよ。」

「長官、コトがおこってからではおそすぎるんですよ。そういうことは三十年まえに、われわれが警告したときに考えてほしかった。まことに、いかんである」

わが国にも、国際的にすぐれた学者がたくさんいるとおもうが、これはいつたにどういうことだったのかねえ……」

「ま、いいでしょう。もう、そのことは――」

それよりも、長官、いよいよA・A・A計画に参加ということになると、どんな問題がおこってくるかわからんですからな。とにかく学者たちの意見を、ここでは尊重して、問題がひろがらないように、手をうつほかはないでしょう」

「……たった三十年でねえ……」

長官たちはもういちど、じつくりと、それぞれの目をじつとじると、そろっていすから立って特別会議室をでていきました。

長官たちがしゃべっていたように、いま、この地球は、全人口が倍になって